



## ディスカッションペーパー

### サイエンス・ディプロマシー: リサーチカウンシルとグローバルリサーチカウンシル(GRC)の役割(日本語仮訳)

#### 前書き

科学者は常に国際協力の最前線に立ち、また、科学は数世紀にわたって世界各国で国際関係の目的のために用いられてきた。ゆえにサイエンス・ディプロマシーは、古い概念の新しい用語である。

サイエンス・ディプロマシーは、異なる文脈や状況に適応する必要がある。今のところ、サイエンス・ディプロマシーをどのように実践するかに関して共通に容認されているガイドラインも、その概念が言い表すところの正確な定義も存在しない。しかし2010年に、ロイヤルソサエティとアメリカ科学振興協会(AAAS)は報告書を発表し、サイエンス・ディプロマシーの三つのかたちを説明した。すなわち、外交における科学—科学からの助言を取り入れて、外交政策の目的を広く知らせること、外交のための科学—外交関係を改善するために、科学面での協力を活用すること、科学のための外交—国際的に科学の協働を促進することである<sup>1</sup>。

サイエンス・ディプロマシーの責任は、いずれの国でも、とりわけ科学や外務に関する省庁など組織を越えて共有されている。サイエンス・ディプロマシーが目指しうることは、次の通りである。すなわち、国内のニーズに応じた取組を推進すること、国境を越えた、または地域における利益のための取組を進めること、グローバルな要請と課題に取り組むことである<sup>2</sup>。サイエンス・ディプロマシーは、国内および国際レベルで適用されるあらゆる法令の範囲内で成立する。

GRC参加機関は、5つの地域会合(2017年10月~2018年1月)を通じて、サイエンス・ディプロマシーにおけるリサーチカウンシルとしての役割、リサーチカウンシル間の国際協力全般と、サイエンス・ディプロマシーを奨励し推進するためのGRC内における協力の役割についての検討に着手した。この初期の検討結果として、主な指針の原則と、アプローチ案が示された。後者は、2018年5月14-16日にモスクワで開催される第7回GRC年次会合の議題として、取り上げられる予定である。

## 原則

### 科学的価値の保護

科学の健全を確保するにあたって、探求の自由、能力主義、科学的な厳正さ、合理主義、貢献度に応じた評価、科学的な自立性、透明性は、必須の要素である。サイエンス・ディプロマシーの文脈においても、これらに変わりがあるわけではない。

### オープンネスの醸成

地理的な境界を克服し、科学研究を越えた利益を生み出すためには、科学におけるオープンネスの醸成が肝要である。最大限可能な範囲において、研究協力、専門家のモビリティ、学術コンテンツへのオープンアクセス、データ共有、知識全般への制約のないアクセスが奨励されるべきである。

### 信頼と関係の構築

科学協力は、国家間の橋渡しにおいて重要な役割を果たしうる。科学は、健全でオープンでなければならない。さらに学界内外の適切な関係も、長期的に維持され、育まれなければならない。この文脈において、科学者同士の間、科学者と政治的意思決定者及びより広く社会の人々との間の信頼という概念は、サイエンス・ディプロマシーの中心となるものである。

### 推奨されるアプローチ案

リサーチカウンシルや国の研究システムごとに、権限、使命および支援事業のポートフォリオは、非常に多様である。以下は、リサーチカウンシルがサイエンス・ディプロマシーに関わり、上記の原則およびそれぞれのコミュニティの支援を醸成する際に役立つと思われるアプローチの例である。これらのアプローチは、各自で追求するのが最適なものもあれば、協力して行うのに役立つものもある。2018年のGRC年次会合における議論は、リサーチカウンシルが協力を望むアプローチと、これを支援するためにGRCが採り得る方法（たとえば将来、再度このテーマを取り上げるなど）の特定に資するであろう。

#### ・支援的アプローチ

##### サイエンス・ディプロマシーについての共通理解の形成

サイエンス・ディプロマシーについての共通理解は必要である。GRCは、参加機関が経験とグッド・プラクティスを共有し、各機関が採用しているサイエンス・ディプロマシーの定義を比較し、サイエンス・ディプロマシーがどのようにリサーチカウンシルとしての業務につながっているかを探るためのグローバルなプラットフォームを提供する。

## サイエンス・ディプロマシーの可能性を生かすキャパシティの拡大

GRC は参加機関に対し、講演、ワークショップ、講義、授賞、サイエンス・ディプロマシーに関わる他の当事者とのコラボレーションなどの活動を通して、サイエンス・ディプロマシーに関する各々の理解を深めるよう奨励する。GRC 参加機関は、サイエンス・ディプロマシーという文脈においても、研究者のトレーニングを支援し、「関連する多様なスキルの獲得とアウトリーチ活動を奨励する」ことができる<sup>3</sup>。GRC 参加機関は、サイエンス・ディプロマシー関連の活動に報いて、インセンティブを与えることもできるであろう。

### ・運用面におけるアプローチ

#### サイエンス・ディプロマシーに関する科学への支援

GRC 参加機関は、その任務の範囲内で、この分野の研究と革新的な思考を支援することができる。これには、二国間および多国間の交渉において用いられるよう、科学的エビデンスに適正な条件を作ったり、サイエンス・ディプロマシーの潜在力を世界、地域、国家レベルで高めるため、インパクト評価を行ったりする分野の研究への支援も含まれる。

### スキームのオープン化

GRC 参加機関は、法的権限の範囲内で可能な場合、研究資金のスキームを国外の科学者にも開き、研究者のモビリティやスタッフの交流を支援し、国際的パートナーと研究プロジェクトの共同公募を立ち上げ、大型研究施設を共同開発するとともに施設全般へのアクセスを促進するよう奨励される。このような国際化は、国家、地域、および世界の研究システムを強化するだけでなく、サイエンス・ディプロマシーのイニシアティブを可能にする。

### ・戦略的アプローチ

#### 共通課題に照らしたサイエンス・ディプロマシーの枠組み作り

GRC 参加機関は、国境を越えた、または非司法的管理区域における共通課題に取り組むために、サイエンス・ディプロマシーによるアプローチを奨励すべきである。このような課題は、全体的アプローチを通してのみ取り組むことができ、科学はこのプロセスにおいてその役割を果たさなければならない。GRC 参加機関は、関連政策の策定にエビデンスに基づく助言を提供するために、国内の外交政策機関との協力関係を強化するよう奨励される。

### 注

1. ロイヤルソサエティおよびアメリカ科学振興協会 (AAAS) 「サイエンス・ディプロマシーの新しいフロンティア」(ロイヤルソサエティ、ロンドン、2010年)
2. P.D. グルックマン、V. テュレキアン、R.W. グライム、T. キシ「サイエンス・ディプロマシー：内側から見た実践の視野」『科学と外交、第6巻第4号、2017年12月』
3. 「未来の創造(人材育成)の原則・行動に関する宣言」(GRC、2014年)